
家なし猫の求愛行動

麻戸 槩來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家なし猫の求愛行動

【Nコード】

N3527V

【作者名】

麻戸 槲來

【あらすじ】

最近、私には悩みがある。うちで預かっている男の子が、全く笑わないのだ。親からの虐待が原因で表情を失ったなんて悲しすぎる…なんとしても笑わせたいと考えていた。無表情な彼の笑顔を初めて見た瞬間、彼女の生活が一変した。年下で、全く異性として意識していなかった男の子に、突然気に入られた女子高生の話。

（前書き）

割と、さうつと読める内容だと思いますので、よければお付き合いください。

へビーな境遇の子は出てきますが、ドロドロしさを今回は感じないと思います。

最近、私には悩みがある。

うちで預かっている男の子が、全く笑わないのだ。

それだけを聞くと、一見クールでかっこいい印象を受けるが、彼の場合はそうでは

なく、表情が全く動かないのだ。

そもそも何故、刀^{はる}瓏くんがそうなったのかといえば、親からずっとネグレクト、

要するに育児放棄をされ、無視された環境で七年間過ごしていたらしいのだ。

七年前といえば彼はまだ8才で、まだまだ手がかかる頃だったろう。にもかかわらず、彼の両親はお金だけを渡し、こまごました面倒は父方の祖母が

見ていてくれたらしい。

そんな状態であつたのに、彼の母親は義母のことを嫌っており彼を渡そうとはしな

かった。その為、懐いている祖母といられる時間は限られ、彼は家で一人過^ごす

ことが多かったという。

祖母は彼にとって、唯一頼れる存在であつたろうに、その存在も刀瓏くんが中学に

上がった頃には亡くなってしまったらしい。

それから、彼は全く笑わなくなったという。

そんな彼のことを何故、赤の他人の私がそんな事を知っているのか
というと、私の
両親の話をしなければいけないであろう。

私の父親は中学校の教師をしており、生徒である刀朧くんを何かと
気にかけていた
らしいのだ。そして何の因果か、私の母親が通っていた華道教室の
先生が、彼の
祖母だった。

刀朧くんの祖母が亡くなった時に、すぐさまうちの両親は彼を引き
取ろうとしたが
彼の両親は世間体とやらを気にして、なかなか預けようとしなかつ
た。

一時、刀朧くんを養子にとまで考えていたようだが、彼の両親の猛
反発にあい、
何とか家で預かるだけでも了承させたのが、去年の秋のことだ。

いくら悲惨な境遇の子だからといって、私より一つ下の中学生男子
を猫っ可愛がり
する訳にもいかず、私は刀朧くと微妙な距離感を保っていた。
だからこそ、余計に笑ってもらうことにこだわることかもしれない。

そんなある日、たまたま私は彼と家に二人つきりになった。

高校に入りたてとはいえ、刀朧くんを一人にするのは良くないとい
うのが私たち

家族の一貫した考えだったため、私自身バイトと、友達とたまにする遊ぶ約束以外

は家にいるようにしていた。

特に話すわけではなくても、同じリビングにいただけで彼は落ち着くらしく、自分

の部屋があるのにここにいた事が多かった。

その為、私はよく刀朧くんの受験勉強を見てあげていた。

あの日も、何時間か一緒に勉強していた後だった。

「はい、いつも勉強お疲れさま」

勉強が終わってから、彼にちょっとお高めのアイスを手渡す。

毎度という訳にはいかなかったが、お金に余裕がある時は、一緒にアイスを食べる習慣

が出来ていた。

このアイスを彼は好きらしい。

表情の少ない刀朧くんが珍しく、少しだけ目元を緩ませるのを見るのが好きだった。

物で釣っている感じがかりこれでいいのかと考えさせられるが、ま

ずのつかみ

としては許してほしい所だ。

大体、甘いものは正義なのだ。

頭を使った後に食べるアイスなど、素敵に決まっている。

それを共有できるこの時間を私は気に入っていた。ただ、一つ望みがあると

すれば…。

「うーん

そのままでも好きだけど、もうちょっと笑ったりすると嬉しいんだけどなあ」

思わず独り言を漏らしていた事に気付いたのは、刀朧くんの言葉を聞いてからだった。

「……すき？

笑うと綾音^{あやね}、ぼくを好きになる？」

「えっ？

うん。っていうか、今のままでも好きだよ」

な、なんでいきなり幼児のようにたどたどしい喋り方になるんだろう。

アイスを食べる前までは普通だったよね？

何より、独り言に思わぬ返しをもらってすごくびっくりした。

ふわっ

えっ？

わ、笑った。刀朧くんが初めて笑った。

彼の笑顔を見た途端、それまでの疑問はどこかに吹っ飛んでしまっ

た。

なにせ初めての笑顔なのだ。

「嬉しいつ。綾音、ぼくを好き？」

「う、うん」

笑みが強くなった。

何度も、好きか確認されるのは恥ずかしいものがあるが、それよりも初めて彼の

笑った顔を見れたことのほうが衝撃だった。

両親と、どんなに笑わそうと馬鹿をやっても笑わなかったのに、ここで笑うのですか！？

「じゃあ、笑う練習する」

「あつ、でも無理はしないでね
少しずつでいいから」

「うん。綾音やさしいから大好き」

はっ、破壊力抜群！！

どうしよう、何なのこの子。かわいすぎるう。

いつもローテンションで、普段はこちらがたじろいばかりなのに…。

しかも、初めてがこれだけ満点の笑顔って。

だ、だれか。いや、父と母にぜひとも見せて差し上げたい!!

この気持ちを分かち合えるのは、二人を置いてほかにいない。写メとか撮ったら

怒るかな？何なら父が買ってきたばかりの一眼レフで取らせていた
だきたい

くらいだけれど、それまで笑顔でいてくれるかなあ？

——だがその前に、これは是非ともその気持ちに答えなければい
けないだろう。

「あつ、ありがとう。」

私も…刀薙くんのこと大好きだよ!!」

言っただ。

言ってやったよ、お母さん。

顔面から火が出そうな勢いだけど、これで滅多に見られない笑顔が
見えるなら、

安いものさ。褒めてくれるよね？お父さん。

「嬉しい。」

初めて好きって言われた」

「いやいや、告白ぐらいされた事あるでしょう」

告白された事が無いなんて、お姉さんは信じません。
貴方はそれだけのお顔を持っておりますよ。

「うん、でも大体知らない人で、何しゃべっていいかわからなくて
黙っていたら、

泣きながらみんな逃げて行っちゃった」

…はっ、つい抱きしめてしまった。

今まで子供にすら無断で抱きついた事はなかったのに、つい衝動に
負けてし

まった。だがこれは最早、異性に対してというより、小動物に対す
る思いに
近い気がする。

——いいや、この際思う存分抱きしめてやれ。

こんなに素敵な子が、きちんと自身を見て好きだと言われたのは、
私が初めて
とか切な過ぎる。

きつと告白してきた子たちは、見た目だけで寄ってきた女の子ばか
りだったの
だろう。

「ふふっ、抱きしめてもらったのも久しぶり。もつとぎゅってして
？」

あう

どれだけ私を墮おとすつもりか！！

幾らでも、抱きしめてあげるさ。

そつえば、彼の祖母は古い考えの人だったらしいので、抱きしめる事などあまり

なかったのだろう。

今まで、ちょっと表情が乏とほしくて淋しいとか考えていてごめんね。

これからは、年齢とか関係なくべたべたに甘やかせてあげるからね
！！

「傍にいてね」

「うん！」

「また、抱きしめてね」

「勿論」

「僕のものになってね」

「喜んで…って

えっ、アレ？」

何だか、とんでもない発言をされた気が…。

「ふふっ、本当にうれしい。」

幸せにしてあげるからね、ぼくのお嫁さん」

唇に柔らかいものが触れたと思った途端に、ちゅッと、可愛い
リップ音が
聞こえた。

「絶対に離さないからね、綾音」

驚く私に向けて、彼はそう艶やかに笑った。
あで

（後書き）

お付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3527v/>

家なし猫の求愛行動

2011年11月13日11時07分発行